



ある政治家の死

全く惜しい方を亡くしたものだと思います。まだ67歳、これからますます円熟した活躍を国内外で精力的に展開されたに違いないでしょうに。政治家の政治判断・政治行動には毀誉褒貶はつきものとしても、国のために身を粉にして、文字通り命を奉げてきたことに間違いない、そういう人にこのような最期が訪れようとは。誠に政治家は、今にしても修羅の道を歩まなくてはならないものかと、言葉が見つかりません。

ご家族の想いは如何ばかりでしょう。人生最大の悲しみは子供を亡くすこと、しかもこのような不条理な形で。殊に春秋を重ねたご母堂が案じられます。

この度のことは、その動機の突飛さからしても、何ともやり切れない怒りが込み上げてきますし、十分避けられたかも知れない悔恨もまた込み上げてきます。

何ともいえない空白感に襲われ、何か自身の心情を吐露せずにはいられなかったのかも知れません、何人かの友人から電話やメールをもらいました。その中に、「歴史に名を残す人物は、自分の人生を半分しか知らない」とありました。幕末のことなら解らなくもありませんが、聞けば、司馬遼太郎の言葉だそうです。

安倍晋三元総理が主導した、「軍靴の音が聞えてくる」と批判された「改正教育基本法」を見ても、「テレビで政治評論も居酒屋で政治談議も出来なくなる」と批判された「特定秘密保護法」を見ても、「安倍をたたき斬ってやる、戦争法案だ」と批判された「平和安全法制」を見ても、「環太平洋経済連携協定」や「自由で開かれたインド太平洋戦略」や「台湾との交流」を見ても、あるいはパンドラの箱を開けたともいわれる今日の「ウクライナ問題」を見ても、日本が本格的に世界政治にコミットしなくてはならない時代を担うに相応しい広い視野と珍しく構想力をもった政治家でした。しかも、ウィットとユーモアを交えて人心を掴み、それを実現出来る巧みな表現力をもったお人柄でした。それは、日本人よりも、むしろ外国人に理解されたのかも知れません。ホワイトハウスやバッキンガムパレスは半旗を掲げ、国連安保理は黙祷を奉げ、各国首脳は弔意を寄せ、海外の要人は弔問に訪れ、ある意味では日本人以上にその死を重く受け止めたことは、これまでの安倍氏の果たした仕事の世界的規模を何より物語っているといいでしょう。

自分が偉くなった気分にもなるのか、日本では政治家と見れば、何でもかんでも^{けな}貶すのが通り相場となっているようですが、政治こそ、生活、安全、教育、経済、福祉、文化等々、全て人間の営みを支える最も重要な役割りを担うものです。これは、決して大袈裟な話ではありません。だからこそ、大局観を持った優れた政治家を世に送り出す選挙というものが如何に大事かということも。

岸信介元総理の孫、安倍晋太郎元外相の子ということから、安倍氏には世襲議員へのステレオタイプの批判や揶揄が投げつけられたこともありましたが、私は、一概に世襲議員がいけないなどと、そんな風に思ったことはありません。むしろ、幼い頃から、食卓で聞く祖父母や両親の会話、人に対する話し方や接し方を、あたかも箸の上げ下げを見るように育った人には、小手先の知識を覚えた単なる受験エリートには届かない、政治家としての資質、見識、生死を賭した振舞いが血肉となって蓄積されていくのです。

戦後を代表する政治家の一人であった中曽根康弘先生は、晩年「政治家は歴史法廷の被告席に立つ」という言葉をしばしば用いられました。それは、政治家としての自信と覚悟の表明ともいえるでしょう。大変な勉強家であった中曽根氏のことから、この言葉のヒントは、間違いなくヘーゲルの「世界史論」でしょう。ヘーゲルは、『法哲学』の中で「世界史ヴェルトゲシヒテ (Weltgeschichte)」こそ、個人の、社会の、民族の、国家の言葉と行動が最終的に裁かれる「世界法廷ヴェルトゲリヒテ (Weltgerichte)」であるといいました。将来、あの時、あの政策があったかからと、日本国民から感謝され、安倍晋三氏がその法廷で、むしろ今後更なる高い評価を受けることは間違いないことだと思います。 (7月12日記)

[>前のページへ戻る](#)